The world's educational system seen through my eyes

国立大学法人山口大学客員教授（国際関係・コミュニケーション）、国際コンサルタント・評論家（オピニオンリーダー）。
東京生まれ、英国育ち。英国王立音楽院で学び、卒業後ソプラノ歌手として活躍したが帰国後引退。1986年より総理府のインタビュアーとして政府広報に携わる。その後、インベスターリレーションズと都市開発のコンサルティング会社設立。
http://www.nishiuramidori.com

新連載 第1回

“国際派大和撫子”が伝える世界の教育現場

西浦みどりの「大学の窓から」

フランス・パリ政治学院①

パリ政治学院（通称シアンスポ）は、フランスのエリート教育機関エナの準備校で、そこには優秀な学生が集まっている。卒業生は、歴代の大統領、首相、主にフランス財界、官界のトップたちで、きわめて困難な関門を通過し、在学中の三年間たいへん過酷で高度な教育を受ける。

例えば、入学する資格のひとつとして、少なくとも数カ国語を話せなければならない上、様々な分野でアカデミズムが問われるのは言うまでもなく、何らかの立場でフランスを代表する人材を徹底した教育制度により育成している。

筆者は、過去十年来、この学院で年に一回、講義をしてきた。因みに今年のテーマは、「日中韓朝印関係と、日米同盟の行方」。今までは、「憲法九条」「戦後日本の世界平和貢献」など、日本の立場を世界に正しく理解されたいという願いを軸に、あくまでも私見として話してきた。一時間半の講義のあと、生徒たちと活発な質疑応答が行われる。

筆者は、十年の節目に政治学院の「強行改革派」で知られるリシャール・デコワン学院長の話を聞くことにした。

デコワン氏が笑いながら言う。「私が学生だったころはフランス人生徒だけ、教授もすべてフランス人でした」。そして、現在では単なるフランス特有の権威主義的な教育は影を潜め、この複雑化された国際社会の中で国益を考えながら世界で共存していくことのできる人材を輩出していると、続けた。

一九九七年より「大学のグローバル化」を進めるため、世界に門戸を開いた。学生は世界各国から難関を突破して入学し、いずれはそれぞれの国に帰って政財官界でリーダー的ポストについて活躍していく人材が集まっている。

リシャール・デコワン学院長（左）と

フランスでは三位、国際的にも上位にランキングされるパリ政治学院ではあるが、グローバリゼーションという言葉が主に指していた、産業、金融界の枠を超え、地球温暖化、食糧問題、石油資源問題のような待ったなしの世界共通課題にも対応できる人材を育成する必要がある。

すなわち、難しい問題を解決する革新的な発想力や、物事の本質を正しく捉えてベストに適応していく力などを養うということだ。

次回では、一八七一年より、同学院がどのように変化を遂げてきたかについてなど、更にデコワン学院長の話を紹介する。